
目覚めてIS世界入り

ねこまたたび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚めてIS世界入り

【Nコード】

N3937Y

【作者名】

ねこまたたび

【あらすじ】

とある日、ワードでISの二次創作小説…いわゆるFFファンフィクションを書いている途中、睡魔に導かれるまま眠ってしまう。

目が覚めると俺は生まれたての赤ん坊で!? 新感覚!? 二

次小説家がIS世界入り! 物書き珍道中始まるぞ! 【友人、作者月詠のArcadiaに投稿している「小説書こうとして・・・どこだよ?」を代理で投稿しているので注意だ】独自スピンオフ作品

「IS<I(一夏だから) S(仕方無い)>も掲載!

第一節 廻る歯車（前書き）

友人の作者月詠が Arcadia にて投稿していた「小説書こうとして・・・ここどこよ？」の改変、代理編集、代理投稿したものです。

盗作ではないので、ご安心を。

第一節 廻る歯車

とあるマンションの、とある一室。
そこに私はいる。

一人用の黒いソファアールから卓袱台に乗ったノートPCのワード
文章を開き、黙々とキーボードで文章を打つ。

カタカタ

『「…ままならんなあ」 星空の元、その言葉は夜風に吹かれて静
かに消えていくのだった。』

一話分の文章を打ち終わると、私はソファアールの上で伸び、指と腕、
背中と首がバキバキと音を鳴らす。
再び画面に向かい、外付けのマウスで画面をスクロールさせ、誤字
脱字が無いか見直し作業に戻る。

「……っし。こんなもんか」

見直しを終えて文章をUSBに保存し、ノートPCの電源を落とす
た後、壁の時計を見る。

すると、時計の針は真上の方向にしか向いていなかった。

「零時か…寝つか。明日は午後バイトだし」

扉横のベッドにフラフラと向かい、ベッドにボフツという音を立て

て倒れこむ。

ベッドに付いた途端、激流のような睡魔が私を襲う。襲い掛かる眠気を抑えながら、最低限ベッドに仰向けに寝転がるように動く。

(…今日は随分書いたな。日記は…朝でいいな。枕の横に置いてあるし)

薄れる目線の先には古めかしい黒い手帳と電子時計。その視界を最後に、私の意識は薄れていった。

ガコン。ゴガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ。

遠くの意識で、歯車の音を聞きながら……

<無意識に書いたと思われる手帳から抜粋>

第二節 転生？憑依？トリップ？それともただの夢？

みなさん、こにやにやちわ。

ふじたゆえ、さんさい。

せいしんねんれい、にじゅういつさい です。

∴地の文が肉体に引つ張られてしまった。 orz

これを読んでいる人々は何がなんだかさっぱりだろう。

安心しろ。私もわからん。

現在判明していることを上げていくと……

- ・ 本来の世界（藤田裕枝のいた世界と仮定）と酷似した世界
- ・ 両親の役職が機械関係の科学者
- ・ この世界の方が技術力が多少高め
- ・ 私の記憶力が異常なまでに発達していた
- ・ 転生特有の自分の死の感覚は無かった？
- ・ 憑依特有の描写はあれど、転生素素も含まれているため違う。
- ・ トリップならば18歳の姿のままのハズ。

今現在で収穫できた情報の中で最初の四つが大きい。

特に記憶力が異常なまでに発達していたことは色々役に立つ。

知識は万物の武器だ。「情報は武器」という言葉もあるくらいだ。

さて、今はこれくらいか。
そろそろお昼だし、ごはんだ！

ごはんだ、ごはんだー！

、 、 、
（ ） （ ） （ ）
、 、 、
（ ） （ ） （ ）
、 、 、
（ ） （ ） （ ）
、 、 、
（ ） （ ） （ ）
、 、 、
（ ） （ ） （ ）

あれからキンクリ三年私六歳、精神年齢24歳です。
衝撃事実、この世界はISの世界でした、まる。

…とどのつまり白騎士事件です。

これがきっかけなのか、両親の研究所がISを取り入れる予定。

父親の旧姓が倉持…そう。白式や打鉄式を担当した倉持技研そのものでした。

さらに困ったことに、この倉持技研…変態の巣窟でした。さら白式もブレオンになるわ。

ISが確定してから一週間で粗方の浪漫武装の後付装備イコライザが販売開始。IS本体より先に装備を一週間で完成とかマジパネエ。

世間が女尊男卑に染まる中、倉持技研の変態紳士や変態淑女には全くの無関係。
変態に性別の壁は無し……ってやつですかね。

あ、そうそう。
妹が生まれました。

…つつてもそれも既に三年前の話。目に入れても痛くないを通り越して逆に入れたくなるほど可愛いんですよ。

名を由那ゆなです。

この子は美人になりますよー！ふふふふふ。

< 藤田裕枝の日記より抜粋 >

第三節 抜き身刀とお節介御曹司（前書き）

別名「筭改心の巻」

さて、そんな私も部活が大忙しな訳で…
美術部主体なんだが、同級生から剣道部の臨時部員として掛け持ちしてるんだ。
いくら文化部と運動部掛け持ちできるからってマジキチでしょう？
大串くんや。

「いや、俺田中……」

「黙らっしやい。そんなだからお前は『ゴメンねっ。他に好きな人できちゃった』と言われて百合百合な状況を目の前で作られるんだ」

「言うなよ…ってか何で知ってんの!？」

「見てたからだよ。録画しながらな。佐渡と平野に見せたら大爆笑だったぞ」

「テメエか！翌日の学校であの二人から嘲笑うかの様な笑みで『ドンマイ（笑）』って肩叩かれた原因はア！」

ちなみに佐渡と平野というのは女子剣道部員で、女尊男卑がなんのその。気さくに話し合える友人たちだ。

さて、話題は変わるが精神年齢三十路の私にも春が来た。
…まあ片思いなのが。

田中、佐渡、平野はそれを笑うことなく応援してくれている。
相手の名を『早乙女のか』。同じ美術部部員で物静かな女の子だ。

そんな片思いの募るある日。

今日は剣道部の練習も無いが、部の先輩（男）から男子用の新しい竹刀を剣道場まで運ぶこととなった。

本数は少ないから苦労は無い。最低でも五本、多くても七本運ぶことになっている。暇を潰せるので別に構わないんだがねえ…

そんなことを考えていると、誰もいないはずの剣道場から、鋭い、素振りの音がした。

引き戸を開けてみると、剣道着で一人、一心不乱に素振りをするポニーテールの女の子がいた。

「誰かと思えば篠ノ之か」

「お前は…藤田だったか」

俺の声に気付いた篠ノ之は竹刀を一振りした後、こちらに振り向いて話す。

篠ノ之しののへの箒。

ISの母、篠ノ之しののへの束むすめの妹で、質実剛健な少女。

しかし、今見ているその姿は『抜き身の刀』を思わせる危険な鋭さを持っていた。

「ほれ、濡れタオルとぬるめの清涼飲料水。汗拭かねえと風邪ひくからな」

「ありがとう」

会話終了…

外のカラスの鳴き声がよく聞こえる。

どうしようもなく長い沈黙が続く気がするため、私は話しかけた。

「篠ノ之はいつも素振りを？」

「ああ。竹刀を降っていると心が落ち着く」

「そーかい」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

会話終了…orz

ま、まだまだ！負けるな私！

「座禅は？」

「竹刀を振れない時ぐらいだ。素振りをすれば心が落ち着くだけでなく鍛えられるからな」

「ほうほう。一石二鳥な訳か」

「ああ、そうだ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ま、またか…

ぐぬぬ…何としても十会話までやってみせる！

「ぬう……」

目の前で頭を抱えて悩む男子生徒。

名を藤田裕枝。

イコライザ

『後付装備の倉持』と言われるほどのIS研究所、倉持技研の所長

ふじたまの

『藤田勝』、旧姓倉持の一人息子。

我が姉、篠ノ之束に次ぐ頭脳とカリスマにより事業を成功させた藤田勝とその妻『藤田ゆき』。

ISが無ければ目の前で悩む男子もただの人間。臨時で剣道部に所属している人物だ。

姉さんが疾走してからは引越しゃ政府の人間が来るなどで忙しく、鬱陶しく思った。

一部の同級生からは「IS作ってもらえない？」だの「専用機が欲しい」だの「束博士はどこにいる？」だの、これも相当鬱陶しいものだった。

だから私は許せなかった。厄介ごとを置いて行き、一夏と離れ離れにした姉さんを、ISを……

話を戻せば、目の前の藤田もISの関係者。仲良くなったふりをして私を人質に姉さんを誘き寄せるのだろうか。

または……

いや、やめておこつ。

あれからというものの、疑心暗鬼が酷い。

猛省が必要か。

……会いたいな。一夏に。

「あー…篠ノ之？」

「ん、む、何だ？」

申し訳なさそうな表情で私に呼びかける藤田。

私は思考が深過ぎたのか、どもりながら受け答える。

「いきなりすごい形相で竹刀をギリギリ音を立てながら力一杯握るから何かと思ったぞ…」

「そ、そうだったか」

「おう。で、話に戻るが…」

「あ、ああ…」

この時点で私は何故、話題回帰を拒否しなかったのか、と未だに公開をしている。

「さては篠ノ之、お前さん…ホれているやつがいるな!？」

「ん!?!ごふっ!ゲホツゲホツ!」

喉を潤すはずの清涼飲料水が武器になった瞬間だった。

「ちよ、大丈夫か篠ノ之!？」

「大丈夫なわけがないだろう!この馬鹿者が!！」

「ふぐう!?!」

駆け寄る馬鹿者に竹刀を叩きつけたのは仕方ないと私は思う。

い、いいいきなり何を言い出すかと思えば「ホれているやつがいるだろう」だと!？」

「いきなり何を言い出すかと思えばそれか!?!何故だ答える!！」

「小さい頃の誕生日に、月のウサギに会いたいと言っていた気が……まさか！」

ISは宇宙空間での活動を想定されて作り出されたマルチフォーム・スーツ。それを篠ノ之に伝えた。

白騎士事件も、元はISに対し興味を持ってさえくれればいい出来事であろうことも。

篠ノ之の望みを叶える物が、その結果歪んだものとなってしまったことも。

篠ノ之博士が篠ノ之の下を離れたのも、篠ノ之や家族に危険な目に合わせないための行為であろうことも。

仮定を前提に、思うことすべてを話した。

話し終えた後の篠ノ之は涙ながらに「どうして一言も……いや、伝えないでいるのが姉さんらしい」と呟いていた。

それから翌日。

私の教室に来たと思いきや

「昨日のことは礼を言おう。心中で疑ったことも詫びる。……色々とすまなかった」

と、爆弾を置いて自分の教室へと帰って行った。

襲いかかってきた男子諸君には全員延髄蹴りで沈めたがな！

女子諸君にはヒートアップする前に「相談に乗っただけ」と伝えただけが、曲解しているらしい。

……篠ノ之には部活にて鬱憤を晴らそう。

(！……この当時の篠ノ之と私の実力は6：4。ルール無用の勝負な

ら5：5だった)

それからと言うもの、篠ノ之…いや、箒にはキング唐変木の一夏に
対するアドバイス。

私には女心のアドバイスを受けた。

私と箒は互いの剣と恋に切磋琢磨する友人同士となり、パートナー
と言うより背中を預け合う好敵手のような存在同士であった。

二年後、「彼女」への最悪の事件と「彼」の出現で、私の世界は急
展開を迎えることを……箒と私は知る由もなかった。

<藤田裕枝の手帳から抜粋>

<雑誌『インフィニット・ストライプス』から一部抜粋>

<篠ノ之箒の日記から抜粋>

第四節 亡失の先、空への一歩（前書き）

詳しい内容は随分先の話となります。

第四節 亡失の先、空への一步

前の書き込みから三ヶ月か。

箒は原作のように力に溺れることなく、純粋な剣の腕で女子の部の優勝を果たし、私も男子の部での優勝を果たした。

優勝者コメントで箒に「勝ち取りたい男がいるらしいからな……」と言った途端に試合中の二倍の剣速でぶっ叩かれたのもいい思い出だ。

倉持技研の白式失踪も起こった。

申請されていた打金式も私が担当し、完成間近。

クラス対抗戦には間に合うだろう。簪ともアニメ仲としても仲良くなった。

……時折背後から殺気のような視線を感じるのはなぜだろうか。

あと、重要なのは???

『今回の【朝までジャッポン!】はこちら……初のISの操縦者となった【織斑一夏】君と、あの倉持技研の御曹司、【藤田裕枝】君についてです。コメンテーターのディーブさんどう思いますか?』

(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)
(、) (、)

…一夏だけでなく、裕枝もか。
だとすると、二人は女子校に放り込まれた小動物と、言ったところか。

一夏は初代ブリュンヒルデの千冬さんの弟。
裕枝は世界に誇る倉持技研局長の嫡男。

「やれやれ。波乱しか巻き起こさないのか。私の周りの男は」

そう呟いて、私は静かに茶を啜るのであった。

(、)、(、)、(、)、(、)、(、)、(、)、(、)、(、)
(、)、(、)、(、)、(、)、(、)、(、)、(、)、(、)

ブリュンヒルデの弟に、倉持技研の若頭……どちらにも有名なものに
関する人たち。

イギリス政府も、「どちらかを引き込めれば御の字」とか……よくも
まあ言ってくれますわ。

「お嬢様。話題の少年達が同級生になりそうですね」

スポーツドリンクを持って来たチエルシーが言う。

イギリス政府としては喜ばしいのでしょうか……

「興味が無い……と言えば嘘になりますわね」

「気になるのは皆同じですから」

「……まあ、そうですね」

スターライトmk?を戻しチェルシーの持って来てくれたスポーツドリンクを飲み干す。

「んぐ…ふう。二人の男が有名な繋がりがあったとしても…」

飲み干したスポーツドリンクの缶を上空に投げ、横一列に展開したブルーティアーズで撃ち貫く。

「私は、^{わたくし}私自身の目で見極めますわ」

織斑一夏、藤田裕枝…

あなた方二人は、私の認め得る存在なのか。
このセシリア・オルコットが見極めさせていただきますわ。

?カコーン

「いたっ!?!」

あ…

（ ）
、 、
（ ）
、 、
（ ）
、 、
（ ）
、 、
（ ）
、 、
（ ）

おじさまにもIS学園の入学を確定させたし、あとはそれまで準備ね。

…一夏とはべつの男は、あの倉持技研の人間なのよね。
双天牙月のプロトモデル、『旋風双牙』は倉持製だから一応挨拶ぐ
らいはしとけて言ってたし。
一応気にかけておこうかな。

(、)
(、)
(、)
(、)
(、)
(、)
(、)
(、)
(、)
(、)

『え、ではこの先、織斑君と藤田君はどうするべきか???』
?ブツン

他に考えることがないのかよ…俺もそうだけど、藤田ってやつも大
変だろうな。

はあ。どうするべきかねえ……

若干途方に暮れる俺の頭に何かが乗っかる。

「何だこれ」

「制服だ」

声のする方へ振り返ると、黒いスーツの女性…我が姉、千冬姉こと

織斑千冬がいた。

「千冬姉！帰ってたのか！」

「ここは私の家だ。そりゃ帰ってくる」

そらそらだ。

冷蔵庫からビールを出して、テーブルの横に座る。

「……って、制服ってどこの？」

「IS学園に決まってるだろう」

……はい？

「え！？ちょ、だって…俺まだ行くなんて……」

「入学手続きも済ませといた」

用意周到で僕あ涙が出そらだよチクショウ！

「あそこにはどこの国も手出しできない。入学すれば少なくとも三年間は安全だ」

ビールを飲みながら話す千冬姉。

まあ、安全保障はされてるみたいだし???

「それとも、モルモット実験動物の方が好みだったか？」

「?…」

確かにそらごめんだな。

「はあー…何でこうなっちゃったかなあ…」

「そう気を落とすな。IS学園も、普通の高校と大差ない。どこで過ごそうと、日々を充実させるのはお前次第だ。ちよつと、もう一人男もいることだし、心労は少ないだろうさ」

ビール片手に、不敵に笑う千冬姉。

でもそれ言っちゃったら藤田が大変そうなんだけど…

「求めよ。さらば与えられん

???

「????流石で」

「まあな」

物語の行き着く先に何があるのか。
今はただ、物語の道を進むのみ。

< 藤田裕枝の手帳より抜粋 >

< 篠ノ之箒の日誌より抜粋 >

< セシリア・オルコットの手記より抜粋 >

< 凰 鈴音の記録より抜粋 >

< 織斑一夏の日記より抜粋 >

第四半節 IS学園生徒資料「藤田裕枝」(前書き)

さて、閲覧しているのは誰なんでしょうね？
謎の追記も一体なんでしょうか？

第四半節 IS学園生徒資料「藤田裕枝」

藤田 裕枝 (ふじた ゆえ)

- ・年齢：15歳 1
- ・身長/体重：174cm/62kg
- ・誕生日：7/25
- ・血液型：O型
- ・IS適正：A
- ・その他：特に無し 2

・容姿

カッコいい、渋い系とはかけ離れた綺麗系の女顔。薄く紫の混じる黒髪。後頭部の下の方で一本縛り。

3

・制服

黒いインナーにショートジャケットタイプの制服。下はスラックスタイル。無論ISスーツは倉持特製で常に着込んでいる。スーツの形状は織斑一夏と同じ形状。

・備考

日本屈指の研究所『倉持技研』が局長の長男。^{イコライザ}後付装備が普及し始めた頃から両親と共にISに関する知識と提案に参加している。

中学から美術部主体に剣道部に所属。中学卒業後は高校受験はせず、倉持技研にて更識楯無の妹、更識簪の専用機「打金式式」の開発、調整に携わっていた。

使用希望ISはラファール・リヴァイブ。

4

< IS学園：生徒資料「藤田裕枝」から抜粋 >
「抜粋時に謎の追記を確認」

1：精神年齢33歳。

2：好物・甘いもの、辛いもの、冷たいもの 嫌物・苦いもの、
極端に熱いもの 好きな言葉・一騎当千

3：綺麗系参考、織斑千冬・「めだかボックス」の黒神めだか。
顔は中の上ぐらい。参考として一夏は上の中ぐらい。

4：転生、憑依、トリップとも違う展開を果たし赤ん坊からリス
ターゲットした元ニートもどき。この頃から一人称は「私」^{わたし} 中学三年に
起きた事件と共に一人称を「俺」にし、口調を軽くするも感情が昂
ぶった時は素が出るほどの付け焼刃。交友関係は中学の同級生であ
る田中、平野、佐渡、篝。倉持関係から更識姉妹、デュノア社関係
者である。

第四半節 IS学園生徒資料「藤田裕枝」(後書き)

IS紹介は後々です。

あと、IS適正はAとありますがBに近いAです。

第五節 同級生は一人知り合い一人男他全員女(前書き)

色々独自設定あり、だそうです。

第五節 同級生は一人知り合い一人男他全員女

「げえっ！関羽！」

「誰が三国の英雄か」

スパンツ！

訳の分からない織斑の言葉に黒いスーツの女性に出席簿で叩かれる状況を横目に、現状を手帳（10代目）に綴る俺。目の前で筭が溜息を吐いている。愛しの幼馴染に漸く会えたと思ったらこの光景だもんな。同情するぜ。

「まったく、お前はまともに自己紹介も出来ないのか」

「今の走馬灯を見返しても趣味特技が見当たらない…」

「人の話を聞け」

スパンツ！（2HIT!）

「ぐおおお…視界が揺れる…!!…って、千冬姉!?なんでここニイヴァー!」

「お・り・む・ら・せ・ん・せ・い・だ!…はあ」

織斑先生もなかなか苦労しているようで…ってか出席簿がとうとう音も無く織斑に叩き込まれたぞ。

その光景を傍観していたのを、俺（幕も含め）は後悔することとなる。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

矛盾しているのはご愛嬌？らしい、初代モンド・グロツソ（ISの世界大会のこと）のブリュンヒルデ（モンド・グロツソの総合優勝者のこと。ちなみに各部門の優勝者を『ヴァルキリー』と言うらしい）。

第二回モンド・グロツソの決勝棄権を最後に引退していた…という噂であったが。

某掲示板の情報ではドイツで臨時教官をしていたとか、していないとか。

まあ、根がそれっぽかったのだろうか。織斑先生から放たれた言葉はどう考えても教官色の強い言葉で

『きゃあああつ！千冬様、本物の千冬様よ！』

『ずっとファンでした！』

『私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！』

『あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！』

『私、お姉さまのためなら死ねます！』

俺と篝が思わず頭を抱えたのは無理も無い。北九州も何も、国外からも来ている者もいると言うに。

そもそも、まるで『兵器を扱う』という危機感が無い。これでは普通の女子高とかのノリだろうに。

アンチ女尊男卑、と言う訳ではないがISが現状、兵器である以上『人が兵器を使う』と言うことに変わりはない。

さて、現状に戻ろう。

この騒ぎに頭を抱えた織斑先生は「よくまあ、ここまで馬鹿を集めたものだな」と言った瞬間も・・・

『キエアアアアアア！お姉さま！もっと叱って！罵って〜！』

『でも時には優しくして〜！』

『そしてつけあがらないように躡して〜！』

なんとという変態連携。・・・というか最初の。噛んだな？今噛んだろ！

もうやだこのクラス・・・

「はああああ・・・まあいい。ついでにもう一人の男子生徒も紹介しておこう。藤田、来い」

うわっ、呼ばれた。

そのまま俺は黒い手帳を内ポケットにしまって織斑姉弟とは逆方向の山田先生の隣に立つ。

・・・山田先生、マジで身長低いな。

「ああー…藤田裕枝です。趣味は簡単な料理、特技…というか習性は物書きか。コンゴトモヨロシク」

最後の言葉で俺の左奥と斜め前が噴き出したが気にしない。

『え、男装女子じゃなかったの!?!』

『千冬様のような綺麗な人かと思ったのに…いや、ありだな』

『一×裕の責任転嫁責め…いや、裕×一の言葉責め…』

『今年は決まったな…』

『ああ…』

なにこれこわい。ホントもうやだこのクラス。

なんかもう色々絶望していると…

『あれ、確か藤田…君? って、あの倉持技研の?』

疑問詞付けるなよデコ助野郎! あ、女だから女郎か。その女性との言葉を切っ掛けに、周囲が騒ぎ始める。

『え!?! あの倉持技研の!?!』

『てことはすっごい御曹司じゃん!』

…。

こうなるとは思ってたがねえ…。

なもの。なにせブレイドオンリー（刀一本）。そうでしょう？織斑教諭」

随分と長々語ってしまったか…

私の言葉に織斑教諭の顔は納得と言わんばかりに晒わらっていた。（奥の織斑は感心するような表情をしていたが…）

「そつだ。私はそれで世界を制した。

さて、話は脱線してしまったが 「む…」 ISが、元は宇宙空間での活動を目的にしていたとはいえ、今は現存兵器中最強の兵器種だ。兵器と言う現実が有る以上、扱いに注意し、下手をすれば命に関わってしまうことだつてある。

それを学ぶのがこのIS学園だ。藤田の怒りも良い教訓となつただろう。IS開発に関わる人間が、一番ISの危険性を知っているからな」

織斑教諭の言葉に罰が悪そうな顔をする生徒達。
理解してくれた様で何よりだ。

「さあ、SHRは終わりだ。残りの自己紹介は各自で済ませる。
ショートホームルーム

それと諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらつ。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。

いいか、いいなら返事をしろよ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

『『『はい…』』』

こうして、波乱のIS学園生活は始まりを告げるのだった。

…もしかして、さっきまで思考が昔のままだったか。

読み返したら昔に戻ってました：orz

第五節 同級生は一人知り合い一人男他全員女（後書き）

ArcadiaのIS小説で私が好きなのはロマンの人と五反田食堂の人です。

第六節 宣戦布告と巻き込まれる原作主人公

俺のSEKKYOU（黒歴史候補）のSHR後。
筈は織斑のほうへ向かった。

さて、暇な状況に…「あの…藤田くん？」む？

黒い手帳を手にどうしようかと悩んでいると、三人くらいの女生徒
…先程の専用機云々言っていた三人だ。

「あの、さつきはごめんなさい。考え無しにあんなこと…」
「ごめんなさい！！！！」

夜竹（俺の隣の人）の謝罪を筆頭に相川（廊下側一番前）と谷
本（織斑の右隣）が謝ってくる。

俺のさつきの怒号で少し怯えている様子。 過剰に怒りすぎた
ツケだろうか。

「いや、いいさ。解ってくれるなら。知らないことは学べばいいこ
と。これからどんどん知っていけばいい」

怯えを取り払うように笑顔で諭す。

これで元気を出してくれるならそれで

「「「お姉様…」」」

はい？

三人が呟いた言葉は周囲に波紋のように広がり、廊下までも静寂が広がった。

視界の端に映る篝の顔は啞然…いや、恐らく自分もだろう。

ただ一人状況がわかっていたいなかったが…言うまでも無く彼だが。

視線だけを動かし、周囲を見回すと、一部を除いて俺に熱い視線を送っていた。

…あの目は織斑先生にも送っていた目だぞオイ。

そして俺に熱い視線を送っていた一部を除く女生徒（廊下に居た他クラス含む）が一斉に頭を下げてこう言った。

「…………お姉様と呼ばせてください！！」「…………」

「わ、わた、俺は男だアアア————！！！」

誰でもいいから助けてくれ…！！

「であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

鬱々としながらの一時間目。

聞き慣れた言葉が横行し、先程の事件を消してくれてるように思えてくる。

女っぽい扱いは多々有ったが、お姉様なんてマジで勘弁だ・・・

このとき、不意に視線を感じる。

織斑である。幼馴染である筈、男である俺に助けを求めような視線を送っているような・・・

しかし

「…（ふいつ）」 窓の方へ顔を背ける筈

「…（しらっ）」 手元の黒い手帳とノートに顔を戻す俺

「っ！」 絶望に染まる織斑

席が隣なら救いはあったのにな…

「織斑君、何か質問はありますか？」

「ウエ！？あー…」

織斑の様子に気付いた山田先生が織斑に問う。

織斑はそれに慌て、聞かぬは一生の恥、とでも考えたのであろう。
苦々しい顔で拳手をする。

「……はい」

「はい！織斑君！」

このとき、箒にも聞いていた。

山田先生、箒から見てあの時如何だった？

…見てて哀れとしか思えなかつたぞ。

…ですよー

結果から言つと織斑はISのことを全く理解しておらず、必読の参考書を古い電話帳と間違えて捨てたそうなの。

…ぶつちやけアホやん。

織斑は織斑先生と補習授業（おはなし）と言つ名の拷問（…簡潔に言えば処刑宣告が下つた訳だ。

意気消沈中の織斑へ箒と俺が近付く。

死んでないよな？

「カカツ　良い感じに死んでるな」

「勝手に一夏を殺すな。死け…処刑宣告のことは残念だったな」

「…言い直す必要はあるのか？」

意気消沈しながらもツッコミを入れてくる織斑。
気を取り直した織斑は顔を上げ、初めて俺と箒と顔を合わせる。

「箒に…藤田？」

「うむ」

「おう。さて、織斑少年。こちらの篠ノ之少女が用事があるようだ。
ここではなんだ…屋上にも行って旧交を深めてきな」

「お、おう？」

「ほれほれ、立った立った」

織斑を無理矢理立たせ、箒と織斑の背中を押す。

周囲から「流石お姉様！」「なんといい気配り…流石だわ」とか聞
こえないからな！

「少し、よろしいでしょうか？」

背後から気品のある声がある。

振り向くと英国人形のような女生徒がいた。

確か、現状一組の専用機持ちのイギリス代表候補生…セシリア・オルコット。

「背後から失礼いたしますわ。倉持技研所属、藤田裕枝とお見受け
致します。私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットです。

以後、よろしく願いますわ。

少々お時間を頂いても？」

…ほう。

これが彼女か。

彼女の国の流儀…ノブレス・オブリージュ（高貴な振る舞いには高

貴な振る舞いを)で行くとしようか。

「ええ、構いません。倉持技研所属、機体関連総合課…藤田裕枝です。」

このままお話…と行きたいところですが、ここはあくまで学業の場。お互い肩を楽しませませんか？」

俺のその言葉にオルコットは少し思索し、溜息一つ。少しの笑みを浮かべる。

「…わかりましたわ。さて、お互い肩を楽しんだところで、すっぱり本題の方へ行かせて貰いますわ」

「了解。聞こうじゃないか。君の要件を…」

「では。はつきり、きっぱり、一言に簡潔に表すならば、『
宣戦布告』ですわ」

「…って、随分強調するねえ」

「それほど重要、ということであ…」

彼女は、気品のある笑みで、そう言ったのだった。

宣戦布告の内容はこうだ。

今度決まるクラス代表を決める際に、俺とオルコットが自らサクラ(仕込み役)として自薦し、他の女生徒は織斑も推薦するだろうか。戦力を測る理由に俺と織斑とで二対一で戦うらしい。

倉持から出ている俺は兎も角、織斑への自衛手段の土台を仕込む為の戦いが本来の目的だ。

それに、オルコット本人には驕りは無いものの、オルコットのIS…『ブルー・ティアーズ』は二対多、二対一の戦いに向いている為、

専用機VS量産機二機のスペック上仕方無しと言っことで決定した。

こうして、原作主人公のいない間に原作最初の戦いが始まるのだっ
た。

第六節 宣戦布告と巻き込まれる原作主人公（後書き）

次回、ついにスピノフ第一回！
面白くないだろうけど見てね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3937y/>

目覚めてIS世界入り

2011年11月16日18時14分発行